



元気っ子

No.274 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

6月を迎え、鈴鹿市からの「家庭保育のお願い期間」が終了しました。全国的にも感染者数が減少し、国としては緊急事態宣言を一応は解除とし、これで徐々に日常が戻ってくることにはなりますが、以前と全く同じ日常というわけにはいかず、「新しい生活様式」をベースにした、いわば「新・日常」という生活をスタートさせることになるだろうと思います。とは言え、またいつコロナウイルス感染者が増加し、緊急事態宣言が再発令されるか分かりません。人の生活レベルで言えば、緊急事態宣言が解除されたからといって、コロナウイルスが存在し、特效薬が開発されていない以上はあまり気の休まる生活とは言えないでしょう。

北九州市では感染者が再び増加傾向にあります。この日々の感染者数の報道を見ていて、いつも思うのは「いったい何人のPCR検査を実施して、陽性反応が何人であったのか」ということです。実際、分母の数はいっこうに報道されないのはなぜなのか、その発表ができない何か特別な理由があるのだろうか、50人検査をして50人が陽性なのと1000人検査をして100人が陽性なのでは全然状況が違うわけです。その分母の数字が知りたいと感じている人は少なくないのではないだろうかと思います。つまり、その検査実施数が公表されない限りは安心して日常生活が送れるようにはならないだろうと思いますし、これが引き続き警戒を続けていかななくてはいけない理由だと思えます。

この元気っ子の原稿を書く前にチラッと5分くらいテレビを見てから保育園に来ました。何の番組だったのかは分からないのですが、このコロナ禍の中で、人が家族一緒に過ごす時間が増えたことに対して、何を大切に考えないといけないのかを、夜回り先生こと水谷修氏が語っていました。内容は「家庭を名門に！」せよということでした。名門とは血筋や財力のことではなく、家庭に「伝統」をもたらさないさい、パジャマのまま朝ご飯を食べるのではなく、きちっと身なりを整えてから頂くなど、生活習慣を直す。そして親は親らしく、子は子らしく過ごさない。そういった内容でした。たった5分くらい見ただけだったのですが、心をつかまれる話でした。保育園は子どもたちが集団生活を学んでいく、人と人との関わり、人間関係を育てていく場所ですが、その基盤になるのはやはり家庭だと思えます。そして大人は子どもたちの良き生活者モデルでないといけないと思えます。コロナ禍で、人は生活の様々な面で制約を強いられていますが、逆にこういう時にしかできない、考えられないこともたくさんあると思えます。以前の生活を取り戻すことに固執するのではなく、何かプラスになる新しい生活様式を手に入れるチャンスととらえるべきなのかもしれません。

コロナ禍は、人類が生活をあまりに便利にしすぎた故の「神仏の怒り」なのではないかと思うことがあります。しかしそこに慈悲の心があるとすれば、それは先に述べたチャンスを残してくれていることだと思います。

